

清室天保藏書
物語五

~ 13
3140
5



門へ 13
3140
5

駿河屋

俊寛僧都嶋物語卷之四

東都

曲亭馬琴編次

第九套

抱袖没海

鶴前安子か事

餓しるもの食を擇まじ。渴するもの飲をそらさじ。窮りのひ妻
 を擇まじ。逃るりの道とえさじ。却説黒尾蛭王の安子と
 共は鶴の前徳壽丸を扶掖す。宇治の危難を脱まじ。河原は
 深くさるる夜は伏見の里波の渡をうちさす。その曛昏佐太近來
 たり。かくく村稍盡るる。白屋は宿を投め。その夜夫婦密中り。
 久後のひ相錯つ。蛭王かひや。案の前は清盛入道か寵臣
 なる。難波三郎経房を撃つ。自教のひふ。其安その死ん首
 級を知らるるといふ。必定入道の怒甚しく。姫君孺君を神

昭和九年十二月購求

ふとく。速く追兵を向らぐ。あんなに遠く寺谷へ入
り入る。所詮夫人の遺言は随ひて徳壽丸の供
へ。鬼畏鳴へ赴く。鶴の前よりたふさくとおぼしめされど娘の
前のおん身と。薩摩方より。あつたせむふと。その
姫君のおん供と。故々。越の水江は到り待たぬ。主君を
綱を。暇多く。一と。音耗せど。
久く又物をおりせらる。彼水江は法勝寺の所領。う
憚ると。又由猪と坐と。今よ至て外は。樹の下より。年を
老ぬ。家尊の親三郎。志信。三年以前。世を去り。又と。安良子は。三年

これを。宣入。忠美の為。此。か。信。見。阿。公。羽。を。刃。の。お。と。ろ。る。お。つ。た。ん。の。面。お。せ。く。あ。り。く。の。主。君。同。胞。か。夫。婦。り。ろ。と。も。お。鬼。畏。と。や。ん。へ。赴。く。鶴。の。前。の。さ。う。ら。僧。都。も。教。び。多。く。お。さ。の。り。と。回。答。され。ば。蟻。王。頭。を。う。ら。掉。す。その。つ。は。やく。稱。が。う。世。お。わ。る。人。の。旅。さ。ぶ。お。女。子。の。十。里。の。外。を。お。と。現。落。人。と。さ。う。の。お。薩。摩。方。へ。さ。う。下。り。の。あ。ん。あ。ん。首。彼。首。お。う。い。と。日。を。の。過。く。六。波。羅。の。討。手。の。兵。士。は。追。跡。を。ま。ゆ。く。鳴。へ。る。お。ど。り。と。同。胞。お。う。捕。ま。り。千。遍。悔。と。う。ひ。め。ん。や。う。お。り。の。お。い。ひ。お。と。安。良。子。げ。よ。と。息。改。て。夫。婦。既。は。合。し。と。舞。の。鼓。を。姫。君。孺。君。は。お。え。お。さ。う。鶴。の。前。へ。決。り

外わらわもあがの夜由よりのむねにやりて目めを押拭ぬひ世々女子をうり形
うり形ののけりと母は前をうり形を哀しく慕ひたれど生は
 死道を異によるんがのうけにと思ひ申すや千里の外はり
ともあらず月ひ日の下は在りと夢くの配へくえ由ゆらぬその悲しみの
亡母はを慕ふや由ゆらぬと存命ぞうの心は何んどうが身由ゆらぬと思へる
捕捕らるるやと所をうりと思ふ伴へくの心はこに翹る身を
うり歎く鳥迹ると思ふゆらぬと思ふ夢くの安否を問へよと思ふの嫌
の中せるの死ようの母は思はぬんが牛若牛曹司ののうりと思ふは隔年
の夏鹿谷の山莊を別にまりうり後の家難は牙ををおたぬと思ふ
音耗由せど音耗をおたぬと思ふの隠家をおたぬと思ふと思
心恨をなさるやゆらぬと思ふと思ふ三年が経たぬと思ふと思ふと思
とも思ふんと思ふに岡山の旅人をうりと思ふ旅寐をものれ親を思ふは
のれ使ふふと思ふ君を思ふのれ思ふと思ふと思ふ遠離る過世の悪業をと思ふ
口説つははくが徳壽丸の女兄君の歎きはいくと思ふと思ふ後ゆらぬ
袖のうりは宿まる月由旅のその心をうりと思ふと思ふと思ふと思
王の安良子と思ふゆらぬと思ふを慰めと思ふと思ふと思ふと思
ゆらぬと思ふと思ふと思ふと思ふと思ふと思ふと思ふと思ふと思ふ
若丸の日來の明白のいひ由ゆらぬと思ふと思ふと思ふと思ふと思ふ
前ゆらぬと思ふと思ふと思ふと思ふと思ふと思ふと思ふと思ふ
只緩やり時を待たし縁をうりと思ふと思ふと思ふと思ふと思ふ
待たしと思ふと思ふと思ふと思ふと思ふと思ふと思ふと思ふと思ふ
うりと思ふと思ふと思ふと思ふと思ふと思ふと思ふと思ふと思ふと思ふ

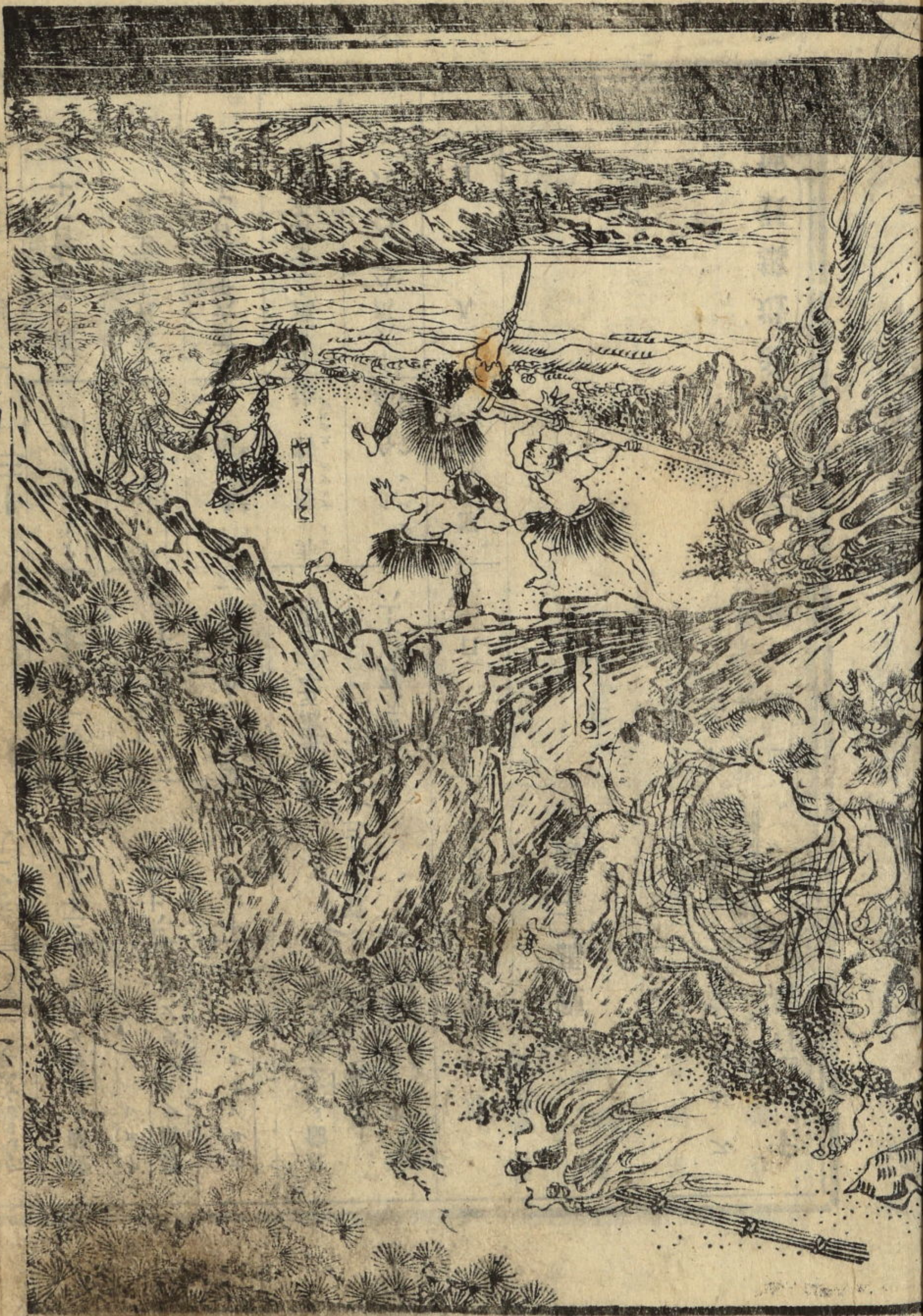
とも思ふんと思ふに岡山の旅人をうりと思ふ旅寐をものれ親を思ふは
のれ使ふふと思ふ君を思ふのれ思ふと思ふと思ふ遠離る過世の悪業をと思ふ
口説つははくが徳壽丸の女兄君の歎きはいくと思ふと思ふ後ゆらぬ
袖のうりは宿まる月由旅のその心をうりと思ふと思ふと思ふと思
王の安良子と思ふゆらぬと思ふを慰めと思ふと思ふと思ふと思
ゆらぬと思ふと思ふと思ふと思ふと思ふと思ふと思ふと思ふと思ふ
若丸の日來の明白のいひ由ゆらぬと思ふと思ふと思ふと思ふと思ふ
前ゆらぬと思ふと思ふと思ふと思ふと思ふと思ふと思ふと思ふ
只緩やり時を待たし縁をうりと思ふと思ふと思ふと思ふと思ふ
待たしと思ふと思ふと思ふと思ふと思ふと思ふと思ふと思ふと思ふ
うりと思ふと思ふと思ふと思ふと思ふと思ふと思ふと思ふと思ふと思ふ

遠くどどと。便宜の地よあつた。丹後の経の岬に到りて西國へ由。
 越路へ由。出船をたゞりゆり。あつた。今一兩日か程なり。彼港の
 より安良子をおとす。水舟を越前へ赴きゆく。某ハその知より。
 磯君のめん供より。西國私に便私し。直に薩摩方より到りて鬼界
 嶋に推渡り。時宜より僧都を竊り進ませ。便宜の地は潜
 りをなむべくありひひへ。はさく。対面のおりせり。いどとら。
 思ふに。され。とより。安良子も又。さす。いひ慰め。更團を
 と。頼を旅の宿あり。いひゆり。鬼界嶋へ進ませ。消息
 のそが。いどとら。孤燈をさす。之に向は。鶴の前。いと痛う
 うら泣く。やう。頭を提。涙を墨斗よりけり。思ひぬ
 つ。嚙締る。筆の運びの際毎に窓より風の吹入。きり。手り。暗

の燈と共は消え。命もと。よふ。身よ。あ。や。紙も。湿り。から。袖
 の雨降を。真菅の。叢虫の。鬼の子。う。て。鬼界。ち。と。啼。つ。と。
 さ。木の。枯。時。の。言。の。茶。さ。う。ふ。さ。つ。巻。あ。る。徳。壽。丸。を。え。え。
 了。く。や。徳。壽。を。思。う。嶋。に。到。り。か。の。書。筒。を。さ。す。進。ま。せ。と。由。
 め。も。ら。ら。へ。と。竊。り。ぬ。り。扶。桑。の。緒。引。を。ぬ。り。角。賀。乃。
 浦。に。綱。引。り。と。う。ら。の。海。人。と。身。を。ば。さ。と。由。の。ら。の。山。の。名。や。
 負。て。親。子。の。り。と。も。世。を。ま。ら。と。由。生。る。う。ひ。の。鯨。江。の。鯨。を。さ。の。風。の。
 ふ。く。井。中。の。中。か。て。も。帰。る。山。嵐。渡。海。安。全。を。祈。り。侍。る。由。を。か。り。と。
 せ。水。菫。の。水。江。の。庄。に。結。ぶ。か。姫。か。歎。を。あ。げ。り。と。ま。ま。よ。三。口。告。
 の。ひ。ね。と。一。封。を。遍。よ。り。徳。壽。を。受。と。り。と。由。安。良。子。
 女。兄。の。前。別。と。い。ふ。由。雲。妻。時。か。程。なり。ゆ。り。と。物。を。思。ひ。つ。と。病。

づつとひのふる。と只一言も同胞の滅らるる別離の悲を蟻王も安
 良子の感涙を押しぬ孝公深く在る神由佛由憐れとて予を
 果さうあへし。その年春の嶺を昔びりよるるの。なつとて
 やいと慰まど。つらき身よびひらぐ馬る。そのめをとと乾ゆぬ袂を
 ちて分ゆ。つらき名残も惜みれ。主後終に被つて。わく鶏
 明曉を告ぐれば。さきありとゆ。佐太の旅宿を去り。津國を
 過り石馬山。伊奈の篠原ふく風中追兵くと驚ま。とを果がうは
 清水の里より山陰道へと日け入り。兩三宿あり。宮津の浦曲
 ちて来より。路をゆく。忙しければ春の日もが。短く悲え
 て亦あり。さうあへし。中暮し。天を結陰。如法闇夜を玄細く
 由徑の岬のつら行を。彼此あて問つ。わけは磯刈松の母より。

漁火焼く。人懸團坐せり。そのめのと。件の主後をほぐぐと
 目送る。一人がひら。這奴ホが模様平人よ。と且夜をこめて。
 連忙しく走る。今朝驛家の長より。令られ。諸人鬼鬼崎の
 流人俊寛僧都とや。ん子どもあへし。故ホはう。んや。年の
 齢も相恋せり。とゆ。と集合へ。海松の備舵。羊侠羊賊
 の悪棍。それハ。さきあつる。とらら。追蒐て擲捕り。
 過分の賞残。あつると。と散動。手も。櫓械郵割の。丁も。
 を引提。あつる。蕉火より。と追。二二町。週。
 忽ち。著。當下悪棍ホ。主後四人を。と。
 繞る。異口同音。や。侯旅客。の。日宇。六波羅の侍
 難波の某と。西を投。走る。俊寛と。ん。子。



徳川実録 巻之四

五



宮津の浦
夫婦
仇を禦ぐ

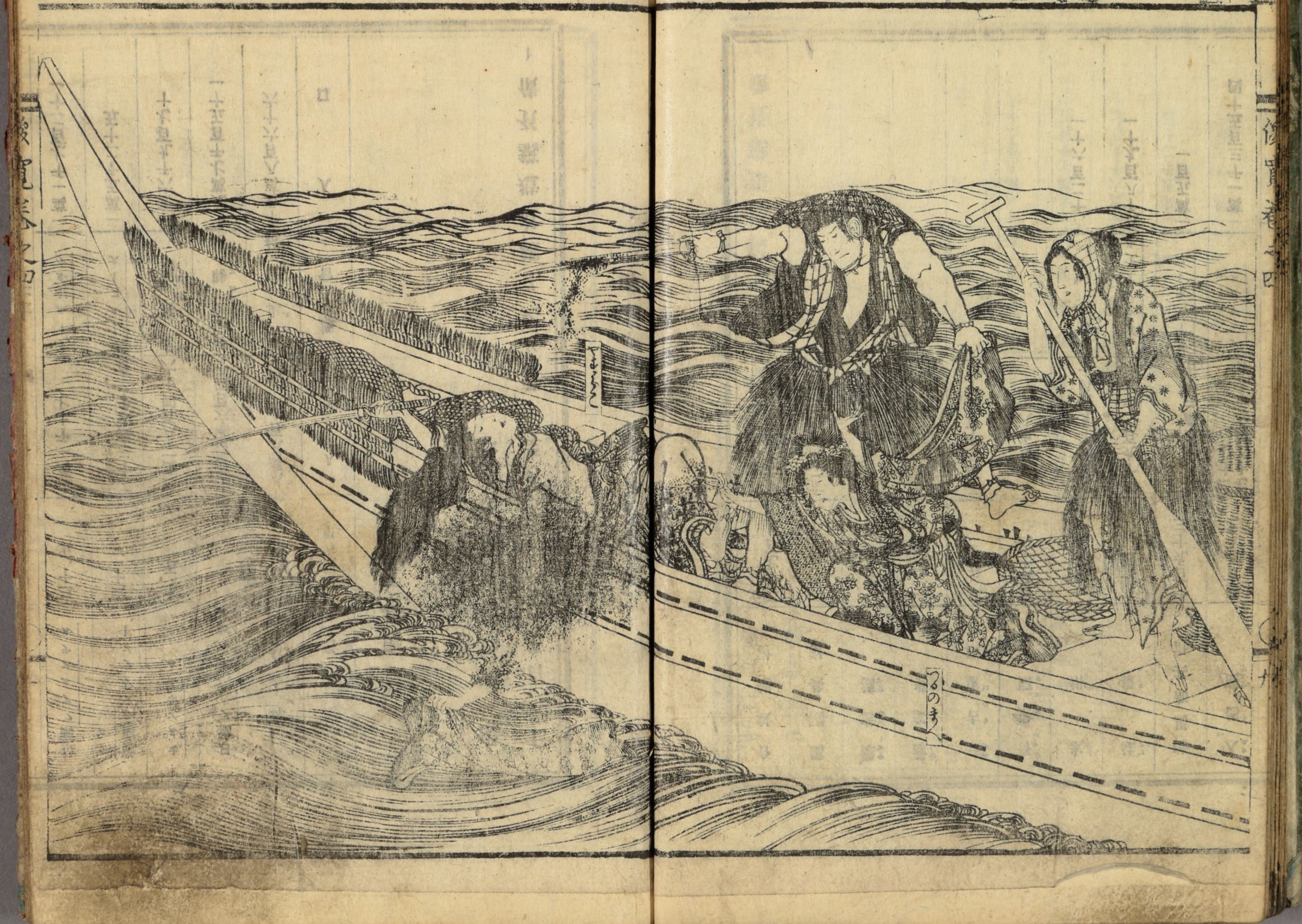
徳川実録 巻之四

五

捕るりのち。殿の賞賚をとりつゝんと。名を令られし。當は汝木か
るるる。頃日の日和のく。酒由酔後。奥むよた鳥こそ
罹ふ。縛を受ふ。とぞ。蟬王をたれを。切
騒かむ。戸の文珠へ。盗人猛勇。人を怕む。言を巧み。陳む
と。打笑ひ。婦と。後思が。骨相書よ。一息。倒せ。罵り。怒り。安良子。焦火を。切拂。跳。散。戦ふ。蟬王。東を。麻
瞬間。両三人を。矢度。破く。両段。その隙。悪棍
徳壽丸を。小腕。抱く。飛。走。去。蟬王。吐。驚
と。引。後。頭。上。閃。挿。打。居。怯
と。ろ。を。破。倒。屍。を。飛。喘。追。残。忍
頼の。悪棍。その。友。殺。物。蟬王。遣。進
を。安良子。塞。遠。留。め。男子。勝。奮。突。戦。令。惜
を。批。四。人。を。款。一。歩。退。三。人。深。瘡。負
一人。を。破。伏。せ。あ。れ。ど。身。藏。石。の。肩。火。二
腕。教。養。の。残。流。鮮。血。を。吸。咽。喉。を。潤。人
背。醫。心。破。著。刀。を。仰。さ。ま。身。由。一。破。將
を。残。両。人。か。左。右。う。う。は。ひ。か。撈。う。刺。んと

うち驚き、船を沖へと漕りどろろ。その妻よりのやう。福原入道
 借盛。あつくりしとれた嚴嶋詣ととろ。船又白魚の飛入りし。こよ
 多に昇進しひる。今夜まごころが船あゆ。愛とれた白魚の入りま
 ぞいと圍く。容止定うあひええころねど。綾の袖の長やうが
 二八むろりの美女るべし。伴るる女子の深瘻を負ぬ。く乳母
 るどあまぐあうんごうん。さうが廢瀝あう衣服を剥とろ。骸の
 沙魚の腹へ葬る。各墜るる。播磨の室るとへ賣とろ。あま
 一色の金ハの易し。飲び多と現あじ。呵とろち笑ふ。安良子
 のみや。こころ教罵れた天を仰とろ嘆息し。いみせん。や席の穴を脱て
 毒蛇の潭入りぬ。山運のさゝるハ歎くあゆる。餘り。原某汝由
 賊りり。遮莫。女子とあひ偏り。後悔とる。とのたわさつ。反

るる刀を忙しく。肢あう押る母。件の賊を刺んととろ。あまのく
 云や。と刃を反り。刃を丁と踏おと。そと嘯と自若と。安良
 子らろの勇しとろ。数箇処の深瘻よせん。さう。齒を切る怒
 の涙と。共又鮮血を漬る。苦痛の呼吸さく。又忍びど。鶴の前由。
 ろうく。又死を究め。ころろの髪結の良人さ。あまの。阿容とと
 賊の手を賣と。と。いつで此刃を操と。悲とる。親と夫又再會
 の。ゆら。又。か。生死存亡を。あま。い。己。と。い。ひ。由。果。と。刃
 を。跳。り。水。底。へ。投。入。と。あま。を。や。ち。り。と。安。良。子。ハ。右。乃
 袂と。い。ま。い。と。件。の。賊。ハ。共。又。投。と。や。あ。ひ。かん。嘯。然。と。さ。と。は
 怒り。左。手。を。伸。し。と。鶴。の。前。の。左。の。袂。を。楚。と。さ。と。と。を。被。て
 安良子。が。袖。も。ろ。と。も。又。臂。を。破。と。破。背。を。い。と。踏



後編 三ノ四

一ノ五
二ノ六
三ノ七
四ノ八
五ノ九
六ノ十
七ノ十一
八ノ十二
九ノ十三
十ノ十四
十一ノ十五
十二ノ十六
十三ノ十七
十四ノ十八
十五ノ十九
十六ノ二十
十七ノ二十一
十八ノ二十二
十九ノ二十三
二十ノ二十四
二十一ノ二十五
二十二ノ二十六
二十三ノ二十七
二十四ノ二十八
二十五ノ二十九
二十六ノ三十
二十七ノ三十一
二十八ノ三十二
二十九ノ三十三
三十ノ三十四
三十一ノ三十五
三十二ノ三十六
三十三ノ三十七
三十四ノ三十八
三十五ノ三十九
三十六ノ四十
三十七ノ四十一
三十八ノ四十二
三十九ノ四十三
四十ノ四十四
四十一ノ四十五
四十二ノ四十六
四十三ノ四十七
四十四ノ四十八
四十五ノ四十九
四十六ノ五十
四十七ノ五十一
四十八ノ五十二
四十九ノ五十三
五十ノ五十四

後編 三ノ四

一ノ五
二ノ六
三ノ七
四ノ八
五ノ九
六ノ十
七ノ十一
八ノ十二
九ノ十三
十ノ十四
十一ノ十五
十二ノ十六
十三ノ十七
十四ノ十八
十五ノ十九
十六ノ二十
十七ノ二十一
十八ノ二十二
十九ノ二十三
二十ノ二十四
二十一ノ二十五
二十二ノ二十六
二十三ノ二十七
二十四ノ二十八
二十五ノ二十九
二十六ノ三十
二十七ノ三十一
二十八ノ三十二
二十九ノ三十三
三十ノ三十四
三十一ノ三十五
三十二ノ三十六
三十三ノ三十七
三十四ノ三十八
三十五ノ三十九
三十六ノ四十
三十七ノ四十一
三十八ノ四十二
三十九ノ四十三
四十ノ四十四
四十一ノ四十五
四十二ノ四十六
四十三ノ四十七
四十四ノ四十八
四十五ノ四十九
四十六ノ五十
四十七ノ五十一
四十八ノ五十二
四十九ノ五十三
五十ノ五十四



毛鼻式船
天の
舟渡
人
云々

天階立

福立明神

勝



宮津道
後成女
水

後成女

水

文殊堂

文殊堂

水

うろく。隣人。安良子が腕を主人の片袖を。腕がまたまた交じり
落。その刃由續て。真逆さす。小沈む。と鶴の羽の。後れ
はら。安良子は抱き著波を披き。飛入り。女。賊。た
手より。袂ハ。断離。手より遺り。ぬい。忽地。い。泡と
消去。折し。めれ。海上。俄頃。風起り。いと。烈。荒波
。船は。落。落。の。肉。く。揺。揺。揺。揺。往方。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。

第十套

抱膝長歎とい

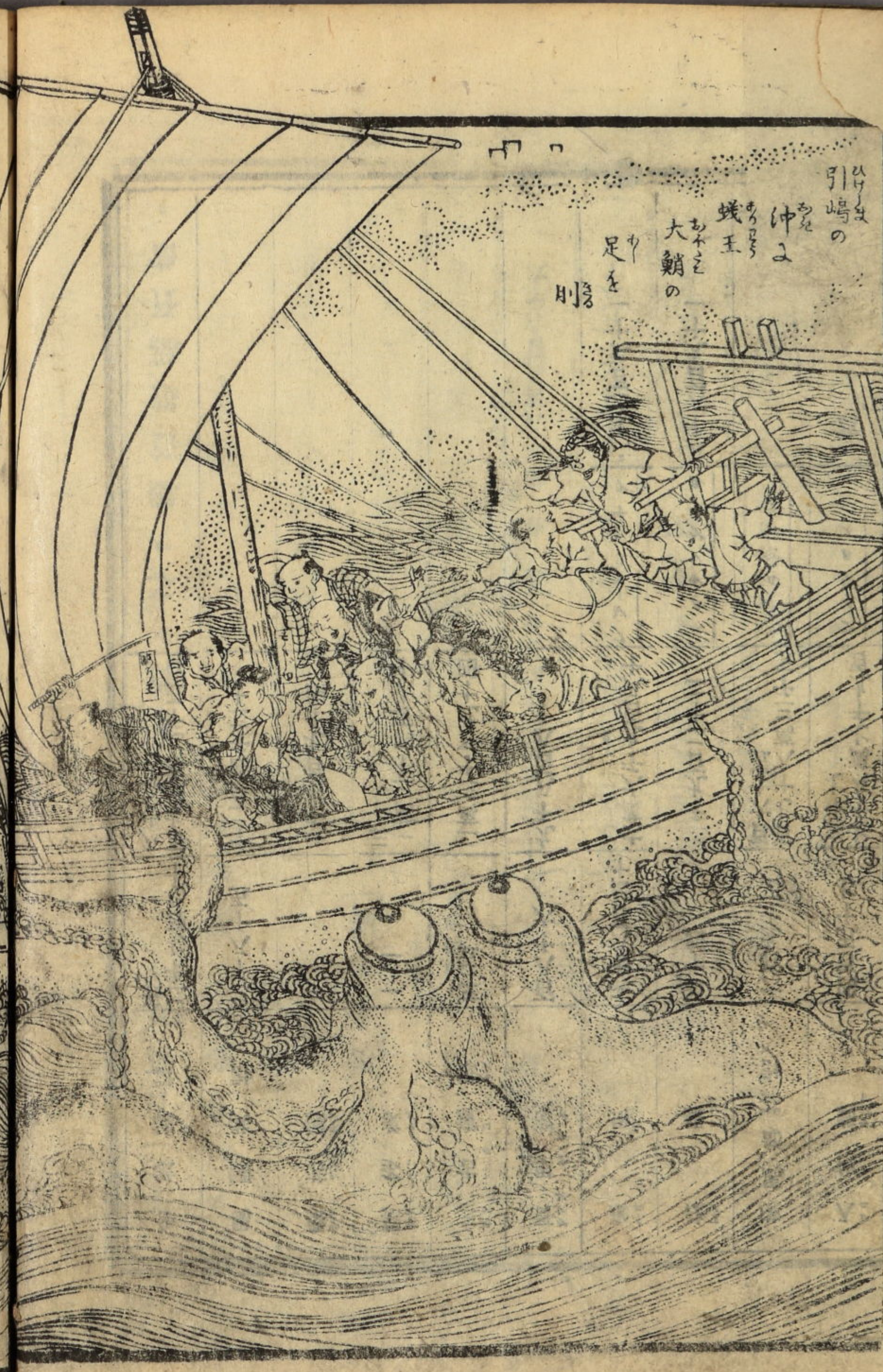
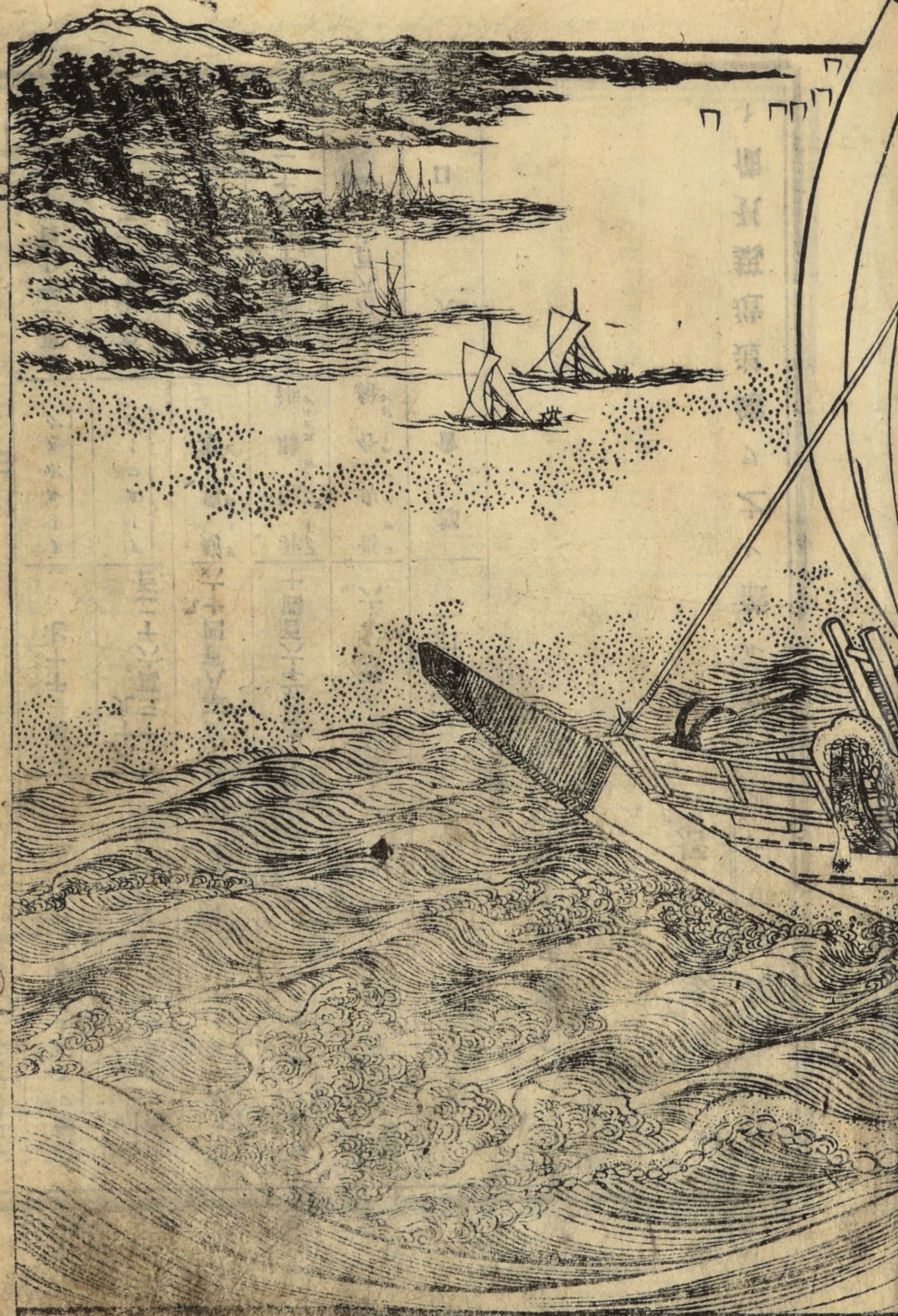
法勝寺僧のみ

賤王の浦曲より。逃る。悪棍を。追入。と九六町。汗。汗。汗。汗。
と息を。破。け。か。て。徳。壽。丸。を。背。負。ひ。つ。舊。の。如。く。さ。り。ぬ。る。ふ。
徳。入。り。け。り。と。安。良。子。の。怒。れ。ら。ん。姫。君。の。竹。如。く。在。ら。ん。や。よ

啼。と。呼。つ。だ。の。演。う。つ。な。く。又。松。風。と。浪。の。音。の。を。悉。く。し。ん。
り。と。あ。ら。め。り。の。い。ふ。べ。う。ゆ。わ。と。ど。め。れ。ど。彼。此。人。の。吹。ま。る。法。螺。貝。と
る。か。主。後。を。搦。捕。ん。と。さ。り。さ。り。と。一。撃。と。する。妻。捕。と。する。人。鶴。の
前。の。救。ひ。を。さ。る。ふ。う。ほ。脱。を。行。六。脱。と。を。見。な。さ。し。と。て。い。は。つ。橋。君。を。楚
と。負。ひ。割。さ。り。と。紛。ま。さ。り。と。さ。り。と。う。が。や。法。螺。の。音。由。遠。離。ぬ。形
て。通。霄。路。を。急。ぎ。う。ら。う。ら。う。と。徳。壽。丸。の。必。死。を。救。ひ。進。り。し
と。れ。ど。鶴。の。前。の。往。方。由。定。ら。る。と。ど。安。良。子。が。死。せ。り。や。生。了。や
を。悉。く。し。ん。只。是。の。か。遺。感。と。と。く。う。ち。歎。く。又。徳。壽。丸。由。お。ま
歎。き。し。伏。沈。む。母。の。前。自。殺。し。ぬ。い。と。又。い。く。程。多。く。女。兒。君。と。は
囚。徒。と。さ。り。ゆ。り。ゆ。り。と。や。鬼。界。へ。尋。ね。ゆ。く。と。も。善。く。は。何。と
ま。う。さ。る。と。も。ゆ。り。ゆ。り。ゆ。り。ゆ。り。と。女。兒。君。を。き。り。復。し。と。ら。と。ゆ。り。ゆ。り

多ハ。蟻王ガオウラウとヤウ。仰理アルハいへども。蟻王ガ身單アキ。
 振ク救ヒ出シテ。さうも。さうも。さうも。さうも。さうも。さうも。さうも。さうも。さうも。さうも。
 婦女子ノアミマレバ。おん命ハ恙ハワド。そのアミマレ。款カハヒを。
 さまぐ。いひひららへ。西を投ケテ。まア母トシ。日数程ありて。長門
 赤間関ニ到リぬ。さうも。主後便船シテ。九州ニ赴クイリ。
 引島ノ沖アキ。その改宿直袋アキ。う海大をサケル。章魚船
 ノ軸先ニ浮エ出。足を脱ス。うちわけケ。覆さんト云フ。さうも。
 私人ホ駭キ慌レヤク。と叫ガ。程ニ。蟻王カを。枝ク。章
 魚ノ足を下ト破ル。足もそのアキ。枝ニ凝著ス。章魚ハ波ノ
 底ニ没ツ。その際ニ。私人ハ。うらじ。船を漕退。さうも。危キ
 事。此。さうも。お。大船ノアキ。うら。い。さ。ま。由。傳。む。いと

怪シキ。さ。み。さ。み。さ。み。と。さ。ま。古。を。振。ク。驚。レ。怖。レ。且。蟻。王。ガ。拳
 動。を。稱。贊。ス。う。ら。う。ハ。蟻。王。微。笑。ス。西。國。ハ。い。さ。あ。ら。む。ど。こ。ハ。故
 御。ノ。隣。國。アル。越。中。滑。川。ノ。大。鱈。ハ。牛。馬。を。さ。り。喰。ヒ。舟。を。覆
 しく。動。ま。レ。バ。人。を。由。取。ル。さ。り。漁。翁。ら。を。捕。ル。又。船。ノ。中。ニ
 陽。睡。しく。さ。ま。を。誘。引。バ。章。魚。窟。ニ。入。リ。足。を。擡。リ。枝。ニ
 う。ら。掛。ル。と。レ。睡。ま。ル。人。岸。破。ト。牙。を。起。シ。蛇。力。ク。その。足を。破。ト
 奔。リ。船。を。漕。退。ス。速。又。逃。ル。その。危。キ。生。死。存。亡。思
 瞬。ノ。間。ニ。あり。その。章。魚。ノ。足を。魚。屋。ノ。簷。ニ。掛。ル。を。見。ル。バ。
 一。足。ノ。帛。を。垂。ル。ガ。エ。ウ。いと。長。ク。地。ニ。至。ル。され。バ。その。疣。
 を。腹。ニ。入。リ。の。三日。あり。さ。り。海。竭。ム。とい。ハ。嘗。聞。筑。紫。ノ。山。中。あり。
 その。形。三四。尺。あり。夫。余。ニ。至。ル。澤。蟹。あり。又。その。蟹。を。打。潰。シ。腹。を



引嶋の
仲又
蟻王
大朝の
足を
別

後寛卷之四

吸ふ蚯蚓のりとはど。吸ふは吸ひ也。蚯蚓は太理が蕉門大山巨海の中。うぐさの物と

あつてあつたらん。莊子は所謂北冥の鯉魚。その形幾千里あるを

あつてと見えざる由亦誣か。かゝるの章魚ハ。是れ怪物也。是れ

魚の足を引放すとこれを長サ六尺ありて。疔の大にさま五六

升を納め瓢のどく。その向に若生く。疔の内ハ。雑魚海蓋ると。

駁あり。章魚ハ物をそり喰ふ。又疔をそり喰ふを喰ふといふ。は

ハ彼が胃おこそと云く。その向に返つて見るは。疔の隻袖を握りちる

腕。疔の内ありたり。ハ切つとちりたり。さきく鑿出と云はるよ。その

袖の長なるは。疔のさると。さきく鶴の前の鞋は。似たり。是れ握りける

掌のちひさなるハ女の腕なるべし。さきくハ鶴の前由安良子由入水と云。

その大章魚の腹を肥えん。ありて薄す。とむらう。果て或はひて忙れ

と云。徳壽丸も長威の候も。試ひあて。潮寄る隻袖と。

共、又袂を絞つ。つら。娘ハ前の記念くと見え。はあて。はあて。はあて。

幸るは。才と云く。月も日也。照る。あつて。あつて。あつて。あつて。

あつて。と往方遠もあつて。夏若の中は。育立人ハ。あつて。あつて。あつて。

備の人ハ。あつて。と云く。口説は。泣沈む。舟登の上は。輓轉也。あつて。

る。疔は。あつて。と云く。豊前の門司。あつて。あつて。あつて。あつて。

は。慰む。その日ハ。肥後の封疆。あつて。あつて。あつて。あつて。

は。蛭王ハ。山太郎。あつて。戸吹の西。あつて。あつて。あつて。あつて。

を。あつて。徳壽丸ハ。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。

。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。

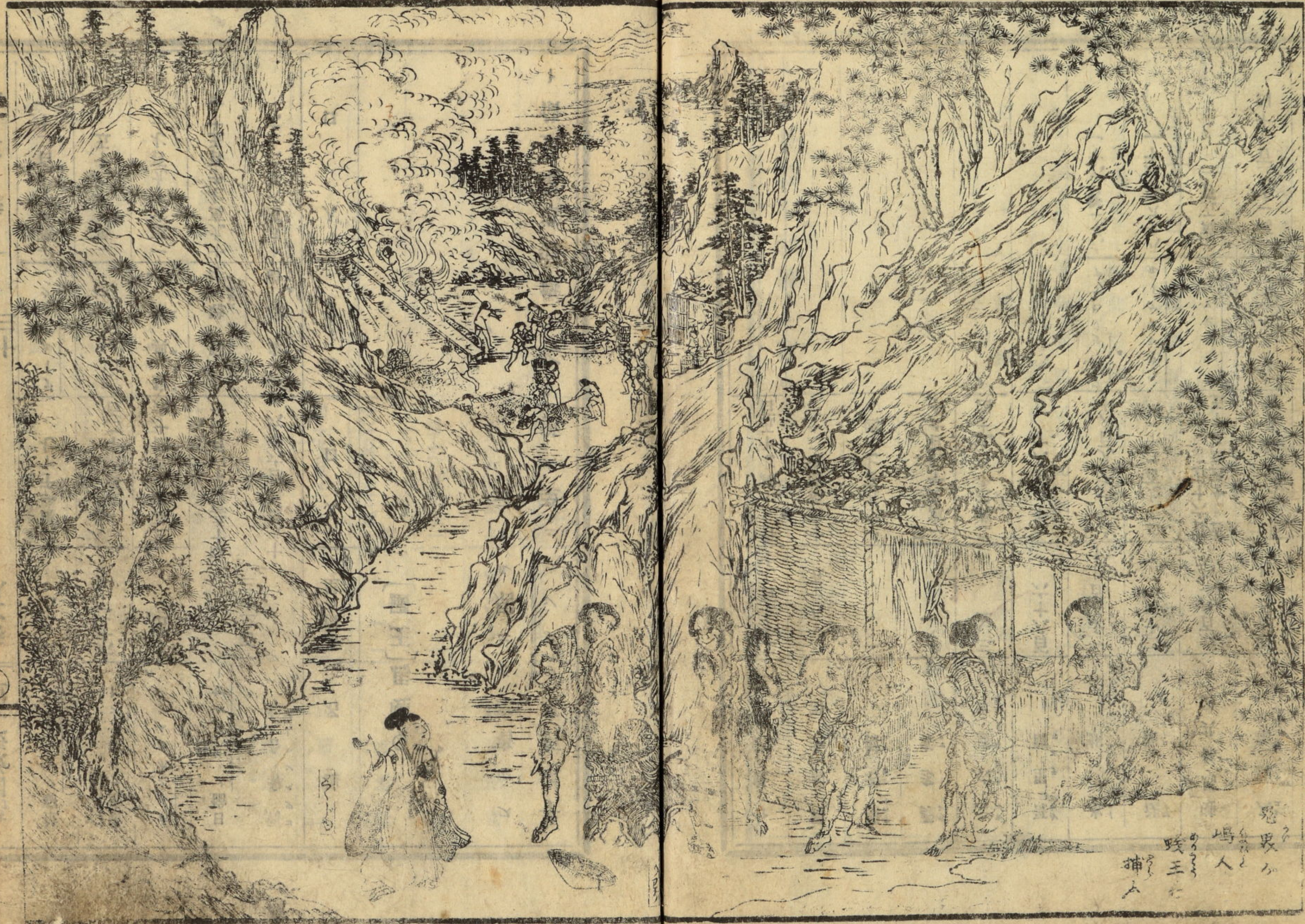
放りハむ。老僧由又強クこれをよめむ。遂ニ二基の塔婆を建ク鶴
 の前を福壽海江量天姑と法号し。安良子を到岸慈航信女と
 法号し。丁嚀又回向し由ひり。されハ蜨王が蜻の足を砍ク。妻ハ腕
 を切リて正後子使え好むのり。彼山を大蛸山と号す。今も
 飛りて。飯田山と稱すと。肥後國山本郡戸次の西は飯田と云ふ山
 あり。是るべし。不顯徳壽主後ハ彼山寺又兩三日逗留し
 長途の勞勞を補ひ。大隅國竹ノの湊は二十日の舟より風まよ
 高航又便航し。主後恙なく。鬼界島を去る。いとくとまればと
 旅衣。日ゆるくと二月。洛を去る。西の海煙子よりねど星霜の
 杖ハ憑ハ蜨王のこありと見え。母ハ前と女兒ハ前の亡魂を
 杖ハ桑の七月の中院あり。且閑の風もさやうあて薄し
 住む虫のこれりとと音みらそ鳴め。拂ひぬ香う。袖よびを
 う海。うりや由と頼むる。神をいそみや硫黄嶋を移る。由三の山は
 擬く。幣献り。康頼の迹改てけり。さハ薩摩方と名總名
 う。國を隔てり。遠き五嶋七島かその中。峯より硫黄の燃
 のがバ。硫黄島と云ふを稱昔ハ鬼の棲多ハ。鬼界島とも喚ほ
 つ嶋。少の酋長もるり。採硫磺戸三十軒。山の半腹を横よ
 穴方。の舟ハ鹿を背かけられ。彼上代の穴居との。あ。概をい
 ろ。んげ。の嶋の分野を。路あり。使る。ハ。層。の。由。の。り。さ
 東ハ漫々たる。其君海あり。白波天と共。高。西ハ岨と。未几山を
 巔より。煙ハ。浅間。由。不及。野。ハ。夷。く。霹。靂。の。の。と
 ろ。と。鳴。る。南ハ。宇。留。麻。の。嶋。と。北。を。ほ。く。と。ん。久。と。の。香。

放りハむ。老僧由又強クこれをよめむ。遂ニ二基の塔婆を建ク鶴
 の前を福壽海江量天姑と法号し。安良子を到岸慈航信女と
 法号し。丁嚀又回向し由ひり。されハ蜨王が蜻の足を砍ク。妻ハ腕
 を切リて正後子使え好むのり。彼山を大蛸山と号す。今も
 飛りて。飯田山と稱すと。肥後國山本郡戸次の西は飯田と云ふ山
 あり。是るべし。不顯徳壽主後ハ彼山寺又兩三日逗留し
 長途の勞勞を補ひ。大隅國竹ノの湊は二十日の舟より風まよ
 高航又便航し。主後恙なく。鬼界島を去る。いとくとまればと
 旅衣。日ゆるくと二月。洛を去る。西の海煙子よりねど星霜の
 杖ハ憑ハ蜨王のこありと見え。母ハ前と女兒ハ前の亡魂を
 杖ハ桑の七月の中院あり。且閑の風もさやうあて薄し
 住む虫のこれりとと音みらそ鳴め。拂ひぬ香う。袖よびを
 う海。うりや由と頼むる。神をいそみや硫黄嶋を移る。由三の山は
 擬く。幣献り。康頼の迹改てけり。さハ薩摩方と名總名
 う。國を隔てり。遠き五嶋七島かその中。峯より硫黄の燃
 のがバ。硫黄島と云ふを稱昔ハ鬼の棲多ハ。鬼界島とも喚ほ
 つ嶋。少の酋長もるり。採硫磺戸三十軒。山の半腹を横よ
 穴方。の舟ハ鹿を背かけられ。彼上代の穴居との。あ。概をい
 ろ。んげ。の嶋の分野を。路あり。使る。ハ。層。の。由。の。り。さ
 東ハ漫々たる。其君海あり。白波天と共。高。西ハ岨と。未几山を
 巔より。煙ハ。浅間。由。不及。野。ハ。夷。く。霹。靂。の。の。と
 ろ。と。鳴。る。南ハ。宇。留。麻。の。嶋。と。北。を。ほ。く。と。ん。久。と。の。香。

とくく跡ゆり。人間の哀情逆旅よまう。就中賜を断られ我
天張鷹か僕疲ま玄焚か馬瘦より。八百日ゆく。濱の真砂のまき
るくも。ワカ又罪を召めぬ。めが荒磯をめぐり見。稀よ来る
ふよ嬾よ。三年さよとひり月。存命づく由りさうん。この世の外
のあひ出よ。今下よびのゆりまう。めん骨よりとち拾りめさく。主後
管屋の門方よ。ま在蛭王声をありまう。喃くこの家又物まうさん
いぬる年。洛より。さよ捨まま。法勝寺の俊寛僧都。か恙るす
在る。と柴色。の彼方より。志かく同じく。主のまのこ意を召る。おら
ふく。彼由来よ。これ由来よと。彼此人を呼集め。羊の解く。丸嶋礼めん。
あむ。うら相暗く。矢度又徳壽丸を引捕へ。押く。素をわけんこと。
賤王さまをえさく。大又怒り。忽此二三人を搔廻く。横地と投退つと

よりと徳壽丸を抱きさうんとさる。丸を嶋人亦腕又携腰さまう。の
押隔く。もも著ど。蛭王さまく。噂さひて。六何を又孺君を擲さん
とさる。いと正ま。このせもあむ。一人の硫磺戸。圓る。眼を是くと光して
とく。出。汝さう。去年の秋。平家の侍。難波三郎。経房より。呼る人。
吾。併又。物。毀。賜。り。く。向。後。り。洛。より。俊。寛。か。秋。族。よ。ね。あ。る。さ。あ。は。
速。よ。ら。ら。殺。せ。急。心。あ。り。く。後。日。その。ゆ。り。あ。え。う。ま。汝。亦。由。罪。あ。る。が。ゆ。り。
と宣ひ。さ。あ。る。ふ。汝。達。か。模。様。を。え。さ。よ。洛。の。人。よ。何。く。加。之。俊。寛。と
やん。法。務。寺。と。やん。の。恙。あ。く。坐。さ。る。や。と。問。う。れ。難。波。ぬ。の。仰。う。さ。あ。
後。よ。ゆ。り。を。え。れ。雅。を。や。後。百。人。か。脅。力。を。め。め。る。勇。士。さ。り。と。由。此。界。の。
ま。里。を。質。よ。ら。つ。狂。り。狂。へ。さ。か。童。を。殺。さ。う。と。い。入。蛭。王。を。れ。を。ゆ。り。
い。う。齒。を。切。る。と。い。く。も。主。を。捕。ま。く。い。う。さ。も。よ。さ。く。且。く。思。い。頼

色を和らげ。嶋人よりつるがいの雨を笑ひ。慾は誘はる。怒もあは。その
 量に殺さとも。船の往來も稀なる。嶋の雅り縁由を悟は出見。あつたに
 勞し。功もたは似たり。三人が中は只一人。赦は偏り。恥を慕はる。主
 とらへ。來り。孝子の志を憐む。鬼畜ふもあつる。主
 けりとも。赦さる。を羨引。それを縛く。その男の重きを。後
 かくても。海放さる。鬼もゆれ。神もゆれ。三尺の太刀を。と
 立化は。塵よせん。笑はる。や。い。あ。と。向。その光を。ひ。定め。と
 見ゆ。い。不。理。多。れ。彼。殘。合。と。さ。の。い。か。其。使。ハ。剛。強。く。
 彼。怒。狂。り。野。の。人。を。傷。む。づ。づ。縛。ら。ま。え。と。い。ふ。幸
 多。れ。と。せ。よ。と。種。と。德。壽。丸。を。と。ら。ら。い。と。長。か。ら。う。様。の。夢。を。見。
 蟻。王。を。縛。め。門。の。楹。は。怒。意。を。り。德。壽。丸。の。取。勢。を。見。嶋。人。亦。は
 對。ひ。片。時。中。で。も。お。ほ。そ。れ。よ。蟻。王。を。縛。ま。と。こ。か。見。む。と。い。ふ。
 あ。の。又。の。在。処。を。あ。ら。う。と。さ。も。放。さ。ぬ。め。の。あ。ら。う。と。い。ふ。縛。ま。と。
 と。あ。ら。う。手。を。背。り。と。決。ま。と。と。い。ふ。蟻。王。の。獵。禽。の。雅。は。鳴
 ら。と。持。と。押。難。と。る。臉。を。あ。ら。う。德。壽。丸。は。ま。と。と。い。ふ。某。く。縛。め
 ら。と。い。ふ。嶋。人。亦。ハ。愚。直。と。る。争。ひ。と。と。い。ふ。意。は。任。と。と。い。ふ。と。い。ふ。
 緩。や。不。理。を。疎。と。ら。う。か。あ。ら。う。と。い。ふ。放。ゆ。と。と。い。ふ。嶋。山。を。只。と。と。い。ふ。お。ん。運。お
 め。ん。と。い。と。痛。ま。と。い。ふ。と。と。い。ふ。律。と。と。い。ふ。僧。都。の。お。ん。馬。と。い。ふ。蟻。王。が。り。を
 り。と。と。い。ふ。と。と。い。ふ。彼。此。と。と。い。ふ。と。と。い。ふ。追。つ。れ。と。と。い。ふ。と。と。い。ふ。と。と。い。ふ。
 り。と。と。い。ふ。德。壽。丸。と。と。い。ふ。と。と。い。ふ。途。と。と。い。ふ。と。と。い。ふ。と。と。い。ふ。と。と。い。ふ。
 回。答。と。と。い。ふ。臍。壁。の。笠。由。雨。と。と。い。ふ。半。冗。と。と。い。ふ。長。旅。と。と。い。ふ。と。と。い。ふ。草。鞋。の。お
 を。結。ひ。と。と。い。ふ。曳。杖。と。と。い。ふ。と。と。い。ふ。秋。の。日。の。ハ。ハ。過。け。り。君。の。年。と。と。い。ふ。



鬼取
場人
三
捕人

とふりど大入く。おぼつろげま立出ぬ。教んやうすて目送りつ又
えりつ主後が羅漢松の樹蔭に隔らじ春ろくねども拭ひあめ
眼さ霞を何ごう。

第十套

抱株索花と

又を慕ふて
磯を呻ふ

徳壽麻呂か

水の面よりからんべくゆめぬ牙を。うらもあまを真愛めりけり
これの楚國の三閭大夫が江潭に放逐す。澤畔に吟ひ。旧羅のうら
を諸り後ぞ。アが牙は負ぬらぬ嶋の巢守とろり果しる。誰を
松浦佐用媛が哀傷といふま。法勝寺の執持権僧都の俊寛
が。牙のろる果を哀まれ。成経康頼歸路の後も。余の惜れ
ば。妻や子よめり。のり磯より夜はのり。赤石も次磨石も
外も。ぬ月の昔よめり。ねど。変えけし面影の憔悴枯槁と瘦衰

へ剃ね髪は肩に垂る。彼凌雲の額を書一夜の中は千字文
を撰。苦み。数ふ。ふか。や啼山鳥頭真白よりぬま。
あの日ぞ。兄仲津波朝と硫黄の氣。さら。鬢い。め。限乃
針を樹より頼骨高く。眼をみ。腹み。ふ。の世ろる。餓鬼道
の苦難比んや。ゆる。海松の工く。ぬ。裾を結び。肩に被腰
小海帯を纏ひつ。嶋葺よ。ほ。雑魚ニツキ。掘。よう
め。来。磯畔。ゆ。び。腰。伸。吻。息。磯。松。株
又尻をゆけ。徳壽。遥。これ。を。呻。と。忙。く。け
ま。つ。た。さ。ん。は。形。人。は。似。人。え。ぬ。相。貌。物。の。め。の
ね。ど。も。め。れ。の。あ。も。り。同。又。の。在。処。を。め。ん。と。め。ひ。下
く。前。も。ひ。ひ。嶋。人。物。と。り。ん。の。ま。り。法。勝。寺。の。執。持。俊。寛

岡又瘞^{うづま}其^{その}の^のし。よりや荒^{あらい}磯^{いそ}又^{また}捨^{すて}る^るま^まと。鳥^{とり}の^の嘴^{くちばし}又^{また}亡^{なげ}體^{たい}を^を破^{やぶ}る^る
 其^{その}の^の人^{ひと}正^{ただ}の^のり^りとも骨^{ほね}を^をば^ばつ^つて^て残^{のこ}る^るん。學^{まな}ん^んと^と果^{はた}敢^{かん}か^から^らず^ず
 其^{その}の^の迹^{あと}審^み又^{また}昔^{むかし}よ^よ夢^{ゆめ}中^{なか}母^{はは}と^と同^{おな}子^ごも^も淡^{あは}同^{おな}る^る又^{また}由^{よし}淡^{あは}淡^{あは}
 小^こ拭^{ぬぐ}ひ^ひの^のむ^むの^の入^い水^{みづ}し^しく^く失^なせ^せひ^ひく^く墳^{ふん}墓^ぼの^のめ^めと^と骨^{ほね}も^もす^す。
 洛^{らく}の^の畏^{おそ}又^{また}三^{さん}年^{ねん}か^か同^{どう}僧^{そう}都^との^のら^らふ^ふ在^あり^り形^{かたち}勢^{せい}又^{また}り^り夢^{ゆめ}り^りし^し
 種^{たね}も^も物^{もの}猪^ぶ猪^ぶた^たぐ^ぐ。え^え来^きら^らの^の寫^{しや}ハ^ハ五^ご穀^{こく}も^も實^みら^らず^ず草^{くさ}木^きも^も稀^{まれ}
 り^り東^{あづま}く^くり^りの^のハ^ハ山^{さん}の^の猛^{まう}火^か吼^うる^るり^りの^のハ^ハ仲^{なかつ}の^の勇^{ゆう}魚^{ぎよ}自^{みづか}ら^らり^りの^の
 磯^{いそ}う^うの^の浪^{なみ}悪^{あく}れ^れり^りの^のハ^ハ峯^ね又^{また}し^しる^る煙^{けむり}赤^{あか}光^{ひかり}さ^さと^と日^ひハ^ハ海^{うみ}より^{より}昇^{のぼ}
 と^とど^ど昔^{むかし}天^{あま}黄^{わう}土^ど風^{ふう}雨^う時^{とき}す^す。ゆ^ゆに^に孤^こ嶋^{とう}又^{また}住^{すま}人^{ひと}の^のあ^ある^るる^る死^し
 の^の生^{なま}活^{かつ}又^{また}山^{さん}又^{また}入^いる^る硫^い黄^{おう}を^を掘^ほり^り又^{また}出^いる^るハ^ハ海^{うみ}藻^{そう}を^を捨^すて^て引^ひ引^ひ
 の^の魚^{うい}の^の妻^{さい}ら^らる^ると^と死^しハ^ハ漁^りる^る人^{ひと}又^{また}手^てと^とあ^あれ^れ。一^{いっ}ツ^つの^の魚^{うい}を^を得^えく^く。

その^{その}日^ひの^の餓^うを^を凌^{しの}ぎ^ぎら^ら。洛^{らく}の^のめ^めと^と何^{なに}知^しら^らず^ず也^や。定^{さだ}め^める^るを^を世^よの^のう^うと^とま^ま
 中^{なか}ハ^ハ罪^{ざい}障^{しょう}ふ^ふく^くと^と三^{さん}人^{にん}か^か中^{なか}也^や。死^しら^らり^り残^{のこ}の^の雪^{ゆき}の^の宿^{しゆく}浦^{うら}中^{なか}に^に死^しす^す
 蟬^{せみ}の^のめ^めと^と撫^な子^こぞ^ぞる^るら^らり^り死^し。春^{はる}過^かる^る秋^{あき}を^をふる^るハ^ハ水^{みづ}の^の氷^{こおり}
 つ^つは^は利^り未^み子^こ妻^{つま}も^も子^こも^も死^しや^やと^とび^びん^んと^と啣^{くち}く^く。四^し大^{だい}衰^{すい}へ^へ三^{さん}塊^{くわい}惑^{まど}ひ^ひ。
 終^{はつ}よ^よの^のあ^あり^りも^もあ^あり^り海^{うみ}の^のこ^こと^と。こ^こら^らる^るく^く由^{よし}なり^りゆ^ゆひ^ひつ^つ。さ^さく^く由^{よし}あ^あん^ん牙^が
 へ^への^の母^{はは}少^{せう}き^きは^は。却^{かえ}ら^らり^りへ^へや^や渡^{わた}り^りゆ^ゆん^ん。い^いく^く零^{あま}露^るの^のみ^みと^と思^{おも}
 を^をある^る家^い隷^{れい}の^の一^{いっ}人^{にん}二^に人^{にん}の^のあ^ある^るら^らず^ず也^や。ハ^ハる^るの^のど^どと^と俱^ぐく^くハ^ハ其^{その}來^きぬ^ぬ
 ぶ^ぶ。り^りと^と研^ひら^られ^れ死^しす^すら^らり^り。と^とい^いり^りも^も子^こも^も又^{また}不^ふ審^{しん}と^とされ^れば^ばと^と此^{この}
 嶋^{しま}中^{なか}の^の蟻^{あひ}王^{おう}と^とい^いり^りの^の又^{また}扶^{たす}引^ひま^ます^すま^まつ^つと^とど^ども^も。僧^{そう}都^との^の現^{げん}
 族^{ぞく}あり^りと^と夢^{ゆめ}す^す。嶋^{しま}人^{ひと}德^{とく}毒^{どく}を^を捕^とり^り放^{はな}す^すと^と。己^{おのれ}を^を死^しす^すと^と蟻^{あひ}王^{おう}の^の
 こ^こら^らり^り身^みは^は代^{しろ}り^りと^と縛^{むす}ら^らる^る。ま^まハ^ハ古^こ屋^やの^の楹^{つゑ}又^{また}餐^{くは}ふ^ふと^と。さ^さく^くや^やせ^せハ^ハ死^しす^す。

徳壽九
荒磯子
又を素



徳壽九

亦痛す。二月。少將判官あり。その由は。つらふ。父の活。
 女。と。父。と。母。前。姉。上。ち。揃。ひ。く。新。間。逢。し。入。船。
 の。鳥。羽。ら。ち。過。く。宇。治。の。里。ま。ぎ。出。迎。う。く。ひ。由。り。又。上。歸。
 洛。ち。り。し。き。と。く。親。引。う。り。る。経。房。か。母。を。入。道。相。國。へ。進。
 せ。ん。と。く。挑。む。由。憎。し。彼。ハ。來。親。々。の。仇。人。あり。思。は。る。怨。か。く。こ。る。い。
 母。の。忽。地。経。房。を。一。刀。と。刺。と。め。く。その。身。由。又。は。伏。せ。ひ。り。か。
 同。胞。ハ。丹。左。傳。つ。か。情。よ。う。く。危。を。脱。せ。蟻。王。安。良。子。と。女。抱。
 せ。し。と。く。丹。後。る。経。の。岬。へ。と。ま。る。圍。さ。夜。に。惡。棍。と。撞。見。つ。女。
 兄。前。の。安。良。子。と。共。入。水。や。志。ひ。ひ。ん。赤。間。と。や。ん。ひ。浦。
 へ。門。司。へ。と。く。渡。る。日。ふ。秘。へ。ち。り。切。け。う。恐。し。げ。る。鮪。の。足。を。蟻。
 王。か。い。ち。と。申。別。う。り。と。見。は。不。必。殘。あ。も。安。良。子。か。破。り。と。見。し。腕。

う。と。お。ぼ。し。を。と。め。右。年。に。握。め。ち。ん。女。兄。前。の。鞋。の。袖。あ。く。り。
 う。り。今。般。又。仰。せ。し。五。巾。の。言。語。す。く。又。又。又。進。せ。よ。と。く。姉。君。
 よ。り。通。され。し。消。息。ハ。人。よ。ろ。と。ま。と。く。と。ふ。く。由。秘。く。身。を。放。さ。
 り。と。ま。され。ど。ぬ。ん。の。世。又。竹。渚。の。鳥。の。迹。由。化。る。像。ん。の。袖。を。か。
 牙。ふ。と。く。乾。の。い。ど。め。の。ま。と。の。又。よ。嶋。人。と。り。口。幾。く。髻。の。内。に。秘。
 する。鶴。の。前。の。玉。五。章。早。と。隻。袖。を。さ。り。出。せ。と。又。く。俊。寛。ハ。位。
 下。と。齒。頬。齧。締。ま。し。と。忍。び。く。く。その。袖。の。雨。暗。間。ハ。絶。と。り。り。り。
 德。寿。丸。由。大。く。く。の。意。中。は。猜。し。く。前。に。立。後。方。に。立。く。位。白。を。
 さら。す。め。り。と。く。う。ら。觀。し。怪。し。や。と。ん。牙。が。物。の。ひ。ご。ま。の。嶋。の。人。り。
 似。ど。り。又。あ。い。な。さ。と。く。ハ。才。の。と。り。別。に。牙。を。り。と。面。鏡。定。ま。
 繕。う。ね。ば。と。と。と。く。と。り。ね。す。の。う。り。の。を。窺。し。と。り。又。又。羞。ひ。て。匿。

下幸集卷 上經大臣 爲道唐使 時支那人 秋之不吉 爲身作彩 爲頭戴燈 燈臺鬼共 子獨宰相 狂支那尋 父燈臺鬼 沈淡紫斷 指頭以血 書目我 元日本華 一家同姓 入爲子爲 翁前世契 隔山隔海 愛情幸經 年流蓬 萬宿逐月 親形破也 御作燈鬼 平飯舊里 寄勤身

秋情有り名告ゆへと携志を。俊寛の忙がハク候とさかハ捲り
 拂ひ。この漫ろるる宣ひそ。灰よゆ俊寛僧都ハ先帝の寵臣
 稚俊卿の孫あり。勅願の大刹法勝寺と云ふの執事あり。されば
 官位ハ權少僧都と上階し。白河の坊京極の宿願麻谷の山莊に
 至るまで奇麗壯觀世の人の耳目を驚かし。十八箇年の庄園を領
 し。ゆくりとぞ。かれハ配知又在ると。ゆか牙のどくろや。且僧
 都ハ年の齡四十のくると。まゝくも過ど。頂の毛ハ長くるると。三斗
 程又雪を欺く。ゆけ白髪之を女生ん。さるをこれをしそ。と
 疑ふハ牛を愛しと牡丹と。鹿をさく馬と。さるの類あり。舊
 のはた屋又まじり。主人又勸解く。蟻王と云ふ人を救ひ出。倍へ
 と。亡又田と。炊の善提を用ひする。されまたを考へ。のむじと

と。ゆかサバ。徳壽頭をうち掉く。平家の追捕忽ちたねハ倍へ
 とくく歸り。がく。日中イヤ西又没ぬ。巴舊のひ屋へ
 由到る。今宵一夜ハ主と。憂をゆ。懇言結款と来
 るんや。伴ひゆく。宿を換る愛著のち。さちよ。い
 まつ。いふと。岳間の苔石。滂咽候を。潤し。人の外。進。物
 入る。れど。疲勞する少年を。お。さ。ん。由。不。便。る。り。秀。あ。く。と
 いひ。く。け。先。は。又。後。は。跟。子。ハ。親。を。し。由。あ。る。憤。の。砂。ゆ。く。ら。む
 黄昏。は。脚。下。圍。を。燈。臺。鬼。燈。の。大臣。を。異。國。に。送。り。一。獨。の。宰相
 が。物。さ。ひ。刈。萱。法師。を。高。野。に。さ。ら。ね。し。石。堂。を。悲。し。く。や。め。か
 や。と。お。け。え。と。哀。れ。る。め。り。

俊寛僧都鳴物語卷之四終 (中山堂)

